

# 多様な環境に育まれた 多くの生きものたち

多様な自然環境に恵まれた調整池には、多くの生きものが生育・生息しています。潮受堤防の締切以降、調整池に飛来するカモ類は10,000～20,000羽を数えることもあるようになりました。また、調整池の誕生により新たに出現した干陸地では、広大なヨシの群落が発達し、約240種の植物や約300種の昆虫類のほか、多くのほ乳類、両生類、は虫類の生育・生息が確認されるようになっていきます。

## 水域でみられる生きもの

### 有明海を代表する魚たち

水域では、平成18年度調査において17種の魚類の生息が確認されています。その中には、有明海を代表する魚であるエツやクルマサヨリもいます。

エツは汽水・淡水の環境に生息し、主な生息域は筑後川河口の有明海ですが、水域ではエツの卵や稚仔魚も確認されており、**＜本種の産卵場－稚仔魚の生育場－成魚の生息場＞**としての環境が整えられていることを示しています。クルマサヨリは本州、九州に分布し、内湾や大河川の河口域を中心とした汽水域・淡水域に生息する種です。

これらの魚は水生植物に産卵するため、水際に繁茂するヨシやヒメガマなどの植物が本種の産卵場として機能していると考えられます。

### バラタナゴとその生息を支える貝類

水域では、バラタナゴ類の生息も確認されています。本種は、川の下流域やクリークのような静水域を好んで生息します。バラタナゴ類の生息には、ドブガイやイシガイなどの産卵母貝となる二枚貝の生息が不可欠です。本種はこれら二枚貝のエラの中に産卵するという生活史を持っているからです。水域の底泥にはこの産卵母貝となるドブガイが生息しています。ドブガイは、幼生期にヨシノボリなどの魚類に寄生するという生態的特徴を持っており、ドブガイが生息するということは、その生活史を支える多様な魚類が生息しているということでもあります。



■エツ(絶滅危惧Ⅱ類)



■エツの卵



■エツの仔魚



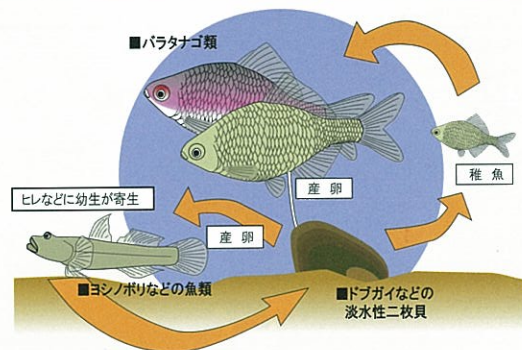
■クルマサヨリ(準絶滅危惧)



■バラタナゴ類



■ドブガイ



■モツゴ



■スッポン



■コイ



■ヌマガエル



■ギンブナ

### 緩やかな流れを好む生きものたち

流れの緩やかな水域は、モツゴ、ギンブナ、コイ、タナゴ類などの淡水魚やヌマガエルなどの両生類にとって良好な生息環境となっています。また、これらの魚類や両生類を捕食するスッポンの生息も確認されています。

下流域や流れの緩やかな水路の川底は主に泥質であり、ここに棲む魚たちの餌となるユスリカやタイリクドロクダムシなどが生息しています。



■ユスリカ（一種）



■タイリクドロクダムシ



## 休息場として利用する野鳥たち

調整池の広大で静穏な水域は、海ガモ類や陸ガモ類が大きな群れで休息するのに適した環境です。水域では、冬になるとホシハジロ、スズガモ、マガモ、ヒドリガモなどのカモ類が数千羽の大群で越冬しています。



■ 調整池に生息する魚がカイツブリ類の餌となる

## もうきんるい 魚を餌とする猛禽類

水域では、魚を狙って魚食性の猛禽類であるミサゴが飛来します。水面をゆっくりと飛び回り、魚を見つけると、素早く翼を羽ばたかせて空中に静止(ホバリング)した後に急降下して、脚を伸ばして両足で魚を捕まえます。



■ ミサゴ(準絶滅危惧)



■ ハヤブサ(絶滅危惧Ⅱ類)

## 水域に集まる鳥を狙う

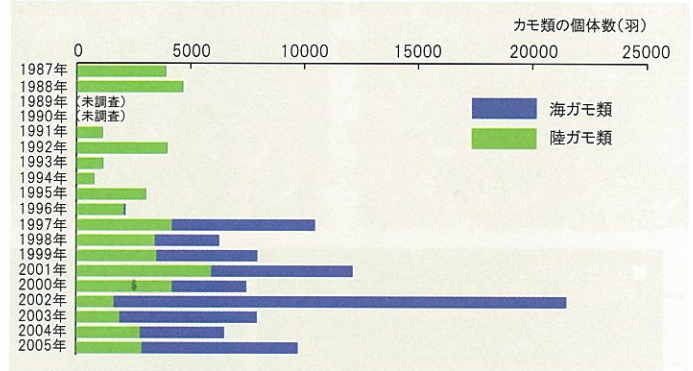
水域やその周辺のヨシの群落では、小鳥類やカモ類を狙って猛禽類のハヤブサが飛来します。

ハヤブサは、飛んでいる鳥を上空から急降下して足で蹴落として捕らえる、というダイナミックな狩りをします。小型～中型の鳥類を主な餌とするハヤブサにとって、多くの水鳥類や小鳥類が集まる調整池は絶好の狩りの場です。



オオヨシキリ、セッカなどのヨシの群落に生息する小鳥類

マガモなどのカモ類



■ カモ類の飛来数の経年変化



# 水際でみられる生きもの

## 水際をすみかとする生きものたち

水際では、ヨシやヒメガマなどの水際植生が発達し、水面下の植生帯の内部には複雑で多様な空間が存在しています。この空間は、小型の水生生物にとって絶好の隠れ場所、採餌場所、産卵場所となるため、ミナミヌマエビやモクズガニなどの甲殻類、モツゴやギンブナ、コイなどの魚類、コオイムシ、アオモンイトトンボなどの昆虫類といった多様な生きものが生息しています。水生植物に産卵する魚類、特にコイやモツゴなどにとって、流れが緩やかで隠れ場所の多い水際植生帯は、産卵場や稚仔魚の生息場としての重要な役割を果たしています。

また、水際部分にはトンボ類、ユスリカ類、ハエ類などの昆虫類が飛来するため、これらを狙うトノサマガエルやニホンアカガエルなどの多くの両生類が生息しています。



■トノサマガエル  
(絶滅危惧 I B類 [長崎])



■ニホンアカガエル  
(準絶滅危惧 [長崎])



■産み付けられたコイの卵



■ミナミヌマエビ



■モクズガニ



■コオイムシ  
(準絶滅危惧)



■アオモンイトトンボ



■アオサギ



■ダイサギ

## 水際からカエルや魚を狙う

多様な水生生物が生息する水際植生帯は、水生生物を餌とする生きものたちにとって絶好の採餌場所となります。アオサギ、ダイサギ、チュウサギなどのサギ類は、調整池内の沖ノ島をねぐらにしていますが、餌を捕まえるために水際に飛来し、ヨシの間から狙いをすまして、水中のカエルや小魚類を捕らえて食べています。

# 干陸地でみられる生きもの

## 干陸地で繁殖する生きものたち

干陸地は、鳥類やほ乳類の繁殖場として重要な役割を果たしています。夏に調整池周辺でみられるオオヨシキリ、セッカは、ヨシの群落内に巣をつくり繁殖します。餌はクモ類、昆虫類などであり、ヨシの群落はこれらの鳥たちの採餌場所としての役割も担っています。

また、ヨシの群落には小型のネズミ類の一種であるカヤネズミが生息しています。カヤネズミは、ヨシの葉を使って、地上から1.5mくらいの高さに野球のボールくらいの丸い巣を作ります。20mほどの狭い範囲で一生活を過ごすため、広大な干陸地のヨシの群落は、カヤネズミにとって安定した生息地であるといえます。

このほか、干陸地の広大なヨシの群落は、マナヅルやナベヅルの貴重な埒(ねぐら)として使われています。



■セッカ



■オオヨシキリ



■カヤネズミ  
(準絶滅危惧 [長崎])



■ヨシの群落に作られたカヤネズミの巣



## 多様な昆虫類

干陸地には、ヨシの群落に特徴的な貴重な昆虫類が生息しています。ヨシの群落と砂泥地が発達する汽水域の湿原に生息するヨドシロヘリハンミョウ、ヨシやヒメガマが繁茂した沼池に生息するネアカヨシヤンマがその代表種です。

このほかにも、ヨシの群落やその周辺の草地には、トノサマバッタやキアゲハなど数多くの草地性昆虫類が生息し、豊かなヨシ群落生態系の底辺を支えています。



## 湿原のタカ —チュウヒ—



干陸地のヨシの群落には、“湿原のタカ”と呼ばれる猛禽類（もうきんるい）のチュウヒが飛来します。チュウヒは、水路や湖沼の周囲に発達する広大なヨシの群落を生息環境とし、上空をゆっくりと飛びながら主に鳥類、ネズミ類、カエル類などの小動物を餌としますが、昆虫類、魚類などを捕まえて食べることもあり、その食性の幅は広く多様な生きものを餌としています。

広大なヨシの群落は、このような食性の幅が広いチュウヒの生息を支えており、チュウヒの生息はヨシの群落の生物多様性を示すひとつのバロメーターといえるでしょう。

## ヨシの群落に生息する捕食者

アリ類、バッタ類、トンボ類などの昆虫類やそれらを餌とするオオヨシキリ、セッカ、ヌマガエル、カヤネズミといった雑食・昆虫食の小動物など多様な生きものが生息しているヨシの群落には、チュウヒ以外にもさまざまな種類の雑食・肉食の捕食者たちが生息しています。ヤマカガシ、アオダイショウ、シロマダラ、シマヘビといったヘビ類、タヌキ、イタチの一種などのほ乳類がそれにあたります。

ヘビ類や雑食・肉食性のほ乳類が生息するためには、餌となる小動物が豊富に生息していることが不可欠であり、これらの多様な捕食動物の生息は、干陸地の生きものの多様性を示しているといえます。

